

桑原 和美

〈はじめに〉

江口隆哉(1900~1977)は、わが国ノイエ・タソツの先達者として位置づけられ、その業績と今日への影響の大きさも人々の認めるところである。⁽¹⁾

本研究では、先に明らかにした⁽²⁾作家活動及び作品、舞踊創作法等の中から特に舞踊創作法に焦点を当て、舞踊研究誌『現代舞踊』(江口発行)を手掛りとして、その創作観及び方法論の確立過程を追跡することを目的とする。

舞踊研究誌『現代舞踊』

『現代舞踊』は、昭和28年11月に創刊され、昭和47年3月終刊までの18年と5ヶ月の間に、合計196号発行された、タテ21cm, ヨコ15.5cm, 単行本大, 平均約30ページほどの月刊舞踊研究誌である。

江口は、創刊の巻頭において、「この雑誌は、現代舞踊(モダン・ダンス)の研究誌である。モダン・ダンスを学ぶものにとって、初法からの、そして深さと広がりを持つものでありたい。モダン・ダンスは革新的な新しい舞踊であるとは知りながら、バレエと混同されたり、単に、スタイルの変ったものぐらいに思われたりもしているので、その啓蒙のためでありたい。」⁽³⁾と目的を記している。

掲載記事の分類・検討から⁽⁴⁾その舞踊研究方向は、上記の巻頭言に示される、一方に「深さ」— 継続した追求、もう一方に「広がり」— 多様な方向から舞踊を捉える、という姿勢を実現しているといえる。内容では、特に舞踊のニュース、批評、評論、社会的問題、対・座談会等、舞踊の現状や生の声を重視する一方、人物史や舞踊史などにも目を向けている。芸術と教育では、多様な広がりを見せる前者により重点を置いているが、後者についても、学校におけるダンスの指導法や作品など具体的なものに渡っている。

江口による執筆は⁽⁵⁾単独・連載の両方にみられるが、その舞踊研究姿勢は、「舞踊創作法」— 「統・舞踊創作法」、「基本運動」— 「基本運動第二過程」— 「モダン・ダンスの基本運動」、「創作練習法」等の継続した執筆の中に、より明確に見ることができると考える。

今回は、このうち、「舞踊創作法」と「統・舞踊創作法」を対象として記述内容を詳しく検討した。

「舞踊創作法」— 具体的方法論の確立

「舞踊創作法」は、昭和28年11月号から、昭和35年9月号までの約7年間、70回に渡って掲載された。内容構成(見出しの大きな項目)は、舞踊概念を述べた「総論」に始まり、「『プロメテの火』創作過程」、「作品の創作基盤」、「作品の構成」、「表現運動」、「空間構成」、「『日本の太鼓(鹿踊り)』の創作過程」、「時間構成」、最後に「むすび」で締めくくっている。⁽⁶⁾

作品の創作過程は、「作品の創作基盤」すなわち「心の働き」⁽⁷⁾と、「作品の構成」すなわち「形象化」⁽⁸⁾の大きく2つの段階から成ると考えられる。「表現運動」、「空間構成」、「時間構成」は、「作品の構成」における主要な三要素であり、これらが、江口の舞踊創作法の中心的柱を成す。それぞれの項目はさらに詳細な見出しに示される具体的な部分に及び、例えば「作品の創作基盤」や「貫通表現」、「表現体になっての生み出し」、「知的参与の多い生み出し」等には方法論としての独自性が認められよう。

「『プロメテの火』の創作過程」、「『日本の太鼓(鹿踊り)』の創作過程」では、創作法を基準として自己の作品を分析的に示し、方法論に具体性と現実性を与えている。それ以外の箇所でも、同様に自己の作品を多数分析例として挙げており、このことから、舞踊創作法が江口自身の創作体験に大いに基づくものであることがわかる。

さらにこの論の特徴は、日本舞踊や歌舞伎、能、いけ花、茶、舞楽、建築、郷土芸能等の日本の伝統的なものや、あるいは演劇、音楽、美術等の創作原理が生かされていることである。彼は、文献や自己の経験に解釈を加え、これらをモダン・ダンスの創作原理構築の基盤としていると見ることができる。

以上のような「舞踊創作法」は、昭和36年に出版された『舞踊創作法』⁽⁹⁾と内容にほぼ一致が見られることから、江口の舞踊創作法は、昭和28年から36年にかけて、『現代舞踊』誌上において確立され、昭和36年の著作上に結実したと考えられる。

「統・舞踊創作法」— 各要素における創作法の追求

「統・舞踊創作法」は、「舞踊創作法」が完結した翌号、昭和35年10月号から昭和47年3月号(終刊号)までの1年6ヶ月、108回に渡り掲載された。見出しの大きな項目⁽¹⁰⁾は、それぞれが独立した内容を持ち、中には創作の具体的な方法を述べた記述も見られるが、総じてモダン・ダンスの概念を論じたものが多い。

(1) 各要素の意味合い

見出しに示される「基本運動と創作」、「古典の技術と新しい舞踊」、「創り出すということ」、

「舞踊の独自性と総合性」, 「舞踊と偶然性」, 「技術というもの」, 「表現運動」, 「基本運動」, 「基本運動と表現」, 「作品の題名」, 「モダン・ダンスの表現形式」……等は舞踊創作に不可欠な要素である。彼は、モダン・ダンスは「創作的、時代的という特徴のほかには、新しい動きと、新しい構成によって表現」⁽¹¹⁾されるという理念に基づいて、これら各要素の意味合いを明確にしようとしている。

(2) 技術の細分化

舞踊の技術に関しては、「正真正銘の身体だけが舞踊の技術ではない。舞う人、踊る人の容姿、持ち味、その人のもっている精神的な裏づけなどの加わったものが発露される総和が舞踊の技術である」⁽¹²⁾としながらも、前時期からの技術論を細分化し、これを「運動オンリーの技術」, 「表現技術」, 「創作技術」の三つに分けたうえで、それぞれについての練習法「基本運動」, 「表現練習」, 「創作練習」を提示し⁽¹³⁾舞踊の技術を理論的に体系づけようとする方向をみせる。

(3) 具体性のあるイメージ

「わからない舞踊」や「モダン・ダンスとバレエの混乱」といった項目では、舞踊の現状を診断し、「もう一度モダン・ダンスの真髓に思いを凝らし、作品の精神内容である主題の追求にも鋭いセンスを磨くとともに、形式内容としてモダン・ダンスに恵まれている〈動き〉と〈構成〉の生み出しに身を以って当るべきではなからうか」⁽¹⁴⁾と述べ、さらに「〈作品の主題〉を考えるとときは、思いつきに似たく精神内容」だけでなく、舞台上に現われるであろう具体性のあるイメージを伴わなければならない⁽¹⁵⁾と、舞踊作家としてつかみとっている想と実現化の機微にも言及している。

(4) 新しい動きと新しい構成

「ホセ・リモンを観て」⁽¹⁶⁾の記述からは、「新しい動きと新しい構成」であってこそ真のモダン・ダンスであるという理念に基づき、作品を、「構成力」, 「アイデア」, 「動き」の観点から分析的に捉えようとする江口独特の鑑賞眼が見い出せる。さらに彼は、個々の作品について、モダン・ダンスの作品として正か否かを診断しようとする。こうしたとらえ方の背景には、自己の思考や行動を常に舞踊創作法と結び付けている彼の姿勢が感じられる。

以上より、「続・舞踊創作法」には、「舞踊創作法」の一貫した考えは継続され、特に新しい展開はないが、先の創作法に〈肉づけ〉—すなわち、舞踊作家としての体験からの着眼をもって—

生命を吹きこむための補綴を行ったものとして、その意味が認められよう。

まとめ

昭和20年代後半から40年代の日本の現代舞踊界は、アメリカのモダン・ダンス概念と技術の流入によって多様化の様相を見せる。こうした時期に『現代舞踊』は19年間継続発行され、その記事内容から、同誌が舞踊研究における「拡がり」と「深さ」を目指し、これを持ち続けたことがわかる。

江口自身は、舞踊創作法を中心としたモダン・ダンスの啓蒙を意図し、その研究姿勢は初心を貫いている。彼はノイエ・タンツに発する舞踊観に基づき、創作体験や、他の芸能・芸術の創作原理を参考として、舞踊創作の具体的な方法論を確立し、さらに主題の在り方や舞踊技術に焦点をあて、論に深化を見せながら、モダン・ダンスの概念を明確にしようとしている。ここには当時の舞踊状況や来日舞踊家公演による影響も見受けられ、作品の鑑賞態度からは、常に舞踊創作法の確立に向けられていた江口の創作観が読みとれる。

昭和47年3月の終刊以降、舞踊創作法に関する彼の新たな記述は見られず、この時点で論は一応の結実をみたと考えられる。この意味で、終刊とほぼ時を同じくして上演された最終作「日本二十六聖人」は、彼の創作活動を締めくくり、舞踊創作法の理念を舞台上に実現しようとした集大成と見ることもできよう。

註(1) 舞踊学会発表資料1・2・3参照。

(2) 「江口隆哉論」お茶の水女子大学修士論文。昭57。

(3) 「現代舞踊」第1巻1号。

(4) 舞踊学会発表資料4, 5-a, 5-b参照。

(5) 舞踊学会発表資料3参照。

(6) 舞踊学会発表資料6参照。

(7) (8)前掲(3)第2巻7号。

(9) 昭和36年7月30日, カワイ楽譜。

(10) 舞踊学会発表資料7参照。

(11) 前掲(3)第9巻3号。

(12) 前掲(3)第11巻1号。

(13) 前掲(3)第12巻3号。

(14) 前掲(3)第18巻2号。

(15) 前掲(3)第18巻9号。

(16) 舞踊学会発表資料8参照。

付記 本研究に当り、御助言いただきました松本千代栄先生、資料をお借りした津田史枝先生、金井美三枝先生、宮操子氏に、この場をかりて御礼申し上げます。